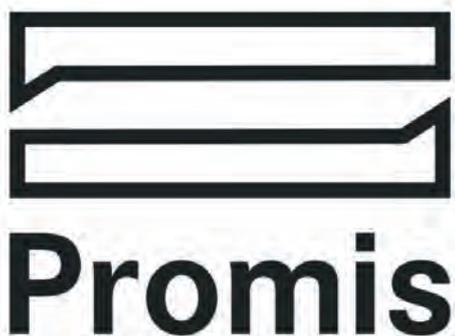


地域連携センター  
Activity Report  
2022-2023



神戸大学国際文化学  
研究推進インスティテュート

Research Institute for  
Promoting Intercultural Studies,  
Kobe University

# 地域連携センター Activity Report 2022-2023

## 目次

地域連携センター長あいさつ…2

### Section1 地域連携のこれまでとこれから

- 高御堂和華さんインタビュー「学生視点から再発見される美山」(2022年度 GSP 参加者による記事) ……4
- 村上早百合さんインタビュー「地域を担う人材を育てる」(2022年度 GSP 参加者による記事) ……5
- 土井祥子先生インタビュー「大学の知の社会実装に向けて」(2023年度 GSP 参加者による記事) ……6
- 石川穂乃香さんインタビュー「まちの魅力を伝え、ファンを増やす」(2023年度 GSP 参加者による記事) ……8

### Section2 地域連携センターとしての活動紹介

- 国連世界観光機関 (UNWTO) 賛助加盟員として グローバルとローカルをつなぐ試み……11
- 神戸ユニオン協会での資料整理・調査 神戸の欧米系コミュニティの史的解明に向けて……12
- 姫路市と地域連携協定を締結 産学共創の試行錯誤を広げていく……13
- 朝来市生野の観光 PR 動画作成に協力しました……14
- 地域と課題を共有する 南丹市美山観光まちづくり協会との観光まちづくりをめぐる連携活動……14
- 学内外での連携と今後の展開……16

## 神戸大学国際文化学研究科には世界と地域を取り結ぶ 地域連携センターがあります

神戸市にある国立大学法人神戸大学には、グローバル化する現代に対応した教育研究組織である大学院国際文化学研究科があり、その付属機関として国際文化学研究推進インスティテュート地域連携センターが2022年4月に発足して活動を展開してきました。それに先立ち2021年、神戸大学は国連世界観光機関（UNWTO）の賛助加盟員になりました。本地域連携センターは、グローバル化が急速に進行しつつある地域社会やコミュニティの文化変容と摩擦を多角的に研究することで、諸地域の社会問題を解決するために設立されました。世界中の国々の政治や文化に精通した国際文化学研究科の教員が蓄積してきた専門知を、具体的な社会とコミュニティで実践可能な総合知として応用し、兵庫県内外の地域において、グローバル化がもたらしている社会問題の解決と、各地域のさらなる活性化に貢献することに取り組んでいます。とくにグローバル化によってさらなる展開を見せているのが、日本各地の観光地におけるさまざまな試みと湧き上がる課題であり、本地域連携センターは観光関連の教育研究活動を本格的に展開し始めています。本地域連携センターは、京都府の南丹市美山観光まちづくり協会と連携して観光まちづくりをめぐる協働を実践してきたほか、UNWTO ベストツーリズムビレッジセミナー2022（2022年5月10日オンライン開催）といったUNWTOとの共催イベントを行ってきました。さらに2023年1月、姫路市において「産学共創フィールドスタディ」も実施しました。これは神戸大学の教職員にくわえて国際文化学研究科と国際人間科学部の院生ならびに学生が参加し、姫路市と縁の深い事業者や諸団体の関係者の参加を得て実現したものです。2023年3月には、国際文化学研究科と姫路市とが地域連携協定（部局協定）を締結し、あらたな活動の場が開かれつつあります。

2022年度に引き続き、私たちはツーリズム EXPO ジャパンに学生たちと参加させていただくことで、みなさまに神戸大学における観光まちづくりに対する積極的な取り組みの現状をご紹介できればと願っています。当日みなさまにお会いし、あらたな関係や活動が生まれるきっかけになりますことを心より楽しみにしております。

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート  
地域連携センター長 板倉史明

# Section 1

## 学生たちがインタビューした 地域連携のこれまで／地域連携のこれから

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）地域連携センターは、2022年4月の発足以来、神戸大学国際人間科学部ならびに大学院国際文化学研究科の教育研究と連携して取り組みを進めてきました。2022年度と2023年度、学部のグローバル・スタディーズ・プログラム（GSP）に参加した学部生たちが、学内外でさまざまな立場から地域連携に取り組んでいる、神戸大学と縁の深いひとたちにインタビューを行ないました。4名のひとたちによる地域連携のこれまで／地域連携のこれからです。

高御堂和華（たかみどう・わか）

京都府美山町（現南丹市）出身。2012年に神戸大学国際文化学部へ入学。在学中に英国のシェフィールド大学都市計画学部へ交換留学し、2016年に卒業。大学時代、スタートアップ企業のインターンシップに参加し、美山のツアーを企画した経験などから、一からすべてを創り上げることの面白さや故郷美山の魅力を実感する。卒業後、一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会に就職。2018年から同協会の事務局長を務める。

村上早百合（むらかみ・さゆり）

愛媛県今治市出身。1984年、神戸大学経済学部卒業。男女雇用機会均等法の施行前には珍しかった男女同一賃金、同一待遇という求人票を見て、神戸新聞社に入社。経済部記者や論説委員など約30年間、記者を経験。最も印象に残っているのは阪神・淡路大震災で、防災・減災の重要性や復旧、復興過程で地方主権の必要性を痛感した。今後は新聞社で培った経験や人脈を生かし、大学と地域のつなぎ役を果たしていきたい。

石川穂乃香（いしかわ・ほのか）

2016年神戸大学国際文化学部入学、イタリアのヴェネツィア大学へ1年間留学し、2021年卒業。大学のゼミでは観光について学び、留学中イタリアの「アルベルゴ・ディフーズ」で3週間のインターンを行った経験から、地域活性化の手段としての分散型ホテルの可能性に着目する。卒業後、日本で分散型ホテルを運営するパリュー・マネジメント株式会社に就職。現在、愛媛県大洲町にある分散型ホテル、「NIPPONIA HOTEL 大洲 城下町」で勤務している。

土井祥子（どい・さちこ）

和歌山市生まれ、大阪府阪南市出身。2002年東京大学工学部都市工学科卒、2004年同大学院工学系研究科都市工学専攻修了（修士）。専門は都市形成史、都市デザイン、歴史をいかしたまちづくり。日本ナショナルトラスト主任研究員、アーバンデザインセンター坂井（UDCS）チーフディレクターを経て現職。福井工業大学非常勤講師も務める。歴史的市街地や農漁村集落の文化的景観の継承に関する計画策定や空き家・空地の再生によるまちづくり、被災文化遺産の復興支援等の実務に従事。

※所属や役職等はインタビュー当時のものです。

美山町と神戸大学は、どのようなきっかけで繋がったのか、経緯をお聞かせください。

私は美山町生まれで、国際文化学部（現・国際人間科学部）出身なのですが、卒業と同時にUターンで南丹市美山観光まちづくり協会で働きはじめました。神戸大学のなかでも、美山と関わりが深いのは国際人間科学部（以下、国人）ですが、国人との連携が始まったのがだいたい3年前ですね。恩師である井上弘貴先生と、辛島理人先生が、本格的に観光まちづくり研究に力を入れはじめていた時期でした。協会の業務でフランスに営業に行く機会があり、そのとき通訳をお願いしていた方のご縁で辛島先生と繋がりができました。2019年の春頃に辛島先生から大学での講演のオファーを頂いて、講演をきっかけとして大学と関わるようになりました。その後、コロナが流行して、学生たちが海外研修（留学）に行けなくなり、井上先生から「なにか代替プログラムを国内で組めないか」という打診があったんです。そのような経緯から、2020年以降、いろいろなプログラムを共同で組むことになりました。

大学との活動としては、具体的にどのようなものがありますか？また、大学との活動は地域側にどんなメリットがありますか？

■ 観光商品の企画造成セミナーの開催

2022年の1月末に美山にて、「一棟貸し古民家の活用を考える美山セミナー」と題したモニターツアーを開催しました。近年、美山には一棟貸しの古民家のお宿を営む方が増えてきていて、その活用可能性を学生と一緒に探ろうという企画です。辛島先生の発案でした。現役神大生、美山の事業者をはじめ、旅行業や行政で働く卒業生、観光関係の企業の方々などが集まって、発表や議論を行いました。参加した一人の若い事業者の方が、「大学生による新しい視点のプレゼンテーションを受けることができ、いい刺激になった」と回答していて、美山側にもポジティブな反応が見られました。

■ ラーニングツーリズム×大学との連携

また、神戸大学のGSP（注1）に刺激を受けて、美山では「ラーニングツーリズム」というコンセプトのもと、美山に研修に来る学生へのプログラム造成に取り組んでいるところです。観光庁の実証事業として「第2のふるさとづくりプロジェクト（注2）」というものがあるのですが、美山はその実証地域として選ばれました。そうしたなかで神戸大学と連携して実施体制に入ってもらい、助言をもらっているという状況です。通常の団体旅行のプログラム造成とは異なり、学生にどのように学びを深めてもらうか、再訪いただくにはどのような仕掛けが必要かといったことを、実際に教育の場にいらっしゃる先生にご助言をいただいたり、事前学修で丁寧に美山を取り巻く状況を学生に指導いただけることは非常にありがたいです。また、

GSP オフィスの篠原先生をはじめ、丁寧な学生のサポートをしていただくことで、地域の方も安心して受け入れができます。

GSP の研修内容を教えていただけますか。また今後、神戸大学とやっていきたいことがあればお聞かせください。

■ 地域の人へのインタビュー／紹介記事の作成

GSP では夏と冬の年2回、学生と地域の交流の場を設けています。このプログラム内で学生が地域の人にインタビューする機会がありました。学生さんにとっても地域を知る良い機会なのですが、美山側にとっても思わぬ発見があったり普段考えないようなことを考えたりできる貴重なチャンスになっています。

たとえば学生さんから「今後（地域や事業を）どうしていきたいですか？」などの質問を受けることによって、「どうして美山に来たのか」「自分たちの仕事はどういうものなのか」「誇れるポイントはなにか」という根源的なことを振り返る機会になるんです。ちなみに今夏のプログラムでは、地域の方の紹介記事を、学生に事前に作成してもらいました。美山を訪れる人に美山の魅力を伝えるにあたり、学生の皆さんの「外からの視点」で記事を書いていただけることは、我々だけではできないことでもあります。

■ 学生と事業者が協力して課題解決に向かう

学生サイドとしても、いきなり「地域の人にインタビューをしてください」と指示されても、誰に何を聞けばいいかわからないと思います。ですので、事前にネット等で人と地域を調べ、記事を作成することは意味があるはず。そのうえで美山に来てもらうことで、円滑で深いコミュニケーションが可能になり、一緒に課題解決に向かっていけることができると期待しています。この「学生と事業者が一体になって解決に向かう姿勢の実現」こそが第2のふるさとプログラムで行いたいことですので、今後もその方法を神戸大学と一緒に模索していきたいですね。

●(注1) GSP…グローバル・スタディーズ・プログラムの略称であり、神戸大学国際人間科学部の学生全員が参加する、実践型の教育プログラム。学生自身の関心に基づいたふるさと海外・国内のフィールド学習を通して、他者と協働しリーダーシップを発揮することで、グローバル社会における課題解決を目指す。

●(注2) 第2のふるさとづくりプロジェクト…観光庁を中心に、「何處も地域に誇れる旅、得る旅」というキャッチコピーのもと始まったプロジェクト。国内観光の創出、および地域経済の復興のための、地域を「第2のふるさと」とし、そこでの新たな旅のスタイルの普及・定着を図っている。

高御堂和華（たかみどう・わか）

京都府美山町（現南丹市）出身。2012年に神戸大学国際文化学部へ入学。在学中に英国のシェフィールド大学都市計画学部へ交換留学し、2016年に卒業。大学時代、スタートアップ企業のインターンシップに参加し、美山のツアーを企画した経験などから、一からすべてを創り上げる面白さや故郷美山の魅力を実感する。卒業後、一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会に就職。2018年から同協会の事務局長を務める。

南丹市美山観光まちづくり協会事務局長 高御堂和華さん

まずは簡単にご経歴と神戸大学に来られた経緯を教えてください。

神戸大学に2022年の6月16日付で着任しました村上です。元々は神戸新聞社で記者をやっていた、最後は執行役員姫路本社代表として管理職として働いていました。定年退職をしようと思っていたところ、急逝した前任者の後を継ぐことになって神戸大学に来ました。ですので、神戸大学のことはまだ勉強中です。地域連携本部のアドバイザーフェローというお仕事させてもらってますけれども、今日は正確な話というより、私の経験や考えも含めてお答えできる範囲でお答えしたいと思います。

地域連携推進本部は大学内ではどのような役割を担っていて、地域のためにはどのような存在になり、どのような視点が求められるのでしょうか。

この組織はもともと、神戸大学の研究成果を地域社会に還元すること、地域を担う人材を神戸大学が協力して育成しようということ、さらには色々な地域課題、地域社会が大きな変化をしている時代の中で、課題を解決するのに神戸大学の知見を役に立ててもらうことを目的として設立されています。2003年に設立され、地域連携推進室から2021年10月に地域連携推進本部という形に格上げになりました。

村上さんが以前に書いた記事のなかで「関係人口を増やすには、まず地域の魅力を伝えなければ。若者の流出先の首都圏で、「播磨」は知られていない。情報発信こそ自治体間でもっと連携した方がいい」とあったのですが、地方の魅力を伝えるためにどのように情報発信をすればよいか、あらためて考えを教えてください。

■ SNS活用時代にこそ、伝えるべき「地域の魅力」に向き合う

そうですね、難しいですね。地域の情報発信ってなかなかできていなくて、兵庫県を兵庫県外に届けるって非常に難しいなあ実感していますね。それをどうやって伝えるかなんですけど、私は長く新聞社にいたので、新聞やテレビ等のマスメディアで報道されるのが一番だと思ってきました。しかし、今はもう新聞の読者は減っていますし、テレビを見ない人も増えています。SNSなどの新しいツールを使わないといけないというのは一つ大きな変化だとは思いますが、ツールよりもまず、「地域の魅力って何か」ということを改めて発掘する必要性を感じています。地域の人って、意外と自分たちのまちの魅力に気づいてない場合が多いんです。子供の時からずっとそこに住んでいるので、景観や資源がまちの個性なのかどうか気づきにくいんですね。私も姫路に着任してすぐの時期は姫路城しか知らなかったんですけど、播磨地域には姫路城以外にも山城がたくさんあったりとか、古い町並みとか、例えば、「銀の馬車道」は昔、生野銀山から姫路港まで銀を運んでたんですけど、そういう沿線には古いまちなみが残っていたりするんです。地域の人たちは当たり前だと思っていることが外から見ると凄い魅力を感じるわけですね。そういう魅力を発掘するのがまず大前提だと思います。それは地域の住民だけではなくか気づ

きににくいので、例えば神戸大学の学生さんたちが、そこに行ったらこんなことがあるのってという驚きや魅力を外部の目から見て気づいてあげて、それを逆に地域の人に教えてあげるといったことは大事かなと思います。

村上さんの視点から今後神戸大学側として、連携していきたい地域があれば教えてください。また、選択した理由があればお聞かせください。

■ 姫路・播磨地域との連携

兵庫県は全体的に魅力ある地域が多いので、いろんな地域と連携してほしいです。けれども、なかなかそうは言っても優先順位をつけなくて一度にはできません。今は神戸大学が地域連携協定を結んでいる自治体がいくつかあり、丹波市、篠山市、朝来市、西脇市、加西市、南あわじ市、それから神戸市と結んでいます。地図を見ると分かるのですが、姫路や播磨、但馬は空白地帯となっています。神戸大学が阪神間に立地しているのでも東の方に偏っているんですけど、私が姫路で勤務していたこともあって姫路・播磨地域ってまだまだたくさん潜在能力があると思っていますので、これから連携していけたらいいかなと考えています。

ところで神戸大学って、姫路にゆかりがあることはご存じですか？いまの国際人間科学部や文学部の前身は姫路高等学校で、神戸に移転する前は姫路にあったんです。それも姫路・播磨地域に目を向ける理由の一つですね。神戸大学は丹波市や篠山市とも農学部を中心に連携していますけれども、農学部の源流が篠山の兵庫県立農科大学だったということで、神戸大学が拠点も設けて学生が活動しているんですね。将来的には姫路・播磨地域にも、学生さんたちが交流できる拠点を設けて、そこを中心に活動を広げていき、地域での神戸大学の存在感をもう少し高めてもらえたらいいなと、個人的には考えています。

現在では地域連携推進本部の一員でもあり、そして元神大の学生の一人として神戸大学には観光・まちづくりに関して将来どのように取り組みをしてほしいとお考えですか。

■ グローバルな視点を持ってローカルに活躍する人材を

神戸大学に期待するのはやっぱり地域を担う人材を育てることですね。神戸大学の学生さんは優秀なので企業に就職されたり海外に出て活躍されたりすると思うんですけど、地域でもグローバルな視点を持ってローカルに活動する人材を育てていただいて、地域を支える人材を育成していただきたいですね。

村上早百合（むらかみ・さゆり）

愛媛県今治市出身。1984年、神戸大学経済学部卒業。男女雇用機会均等法の施行前には珍しかった男女同一賃金、同一待遇という求人票を見て、神戸新聞社に入社。経済部記者や論説委員など約30年間、記者を経験。最も印象に残っているのは阪神・淡路大震災で、防災・減災の重要性や復旧、復興過程で地方主権の必要性を痛感した。今後は新聞社で培った経験や人脈を生かし、大学と地域のつなぎ役を果たしていきたい。

Q これまでのご研究内容、神戸大学に来られた経緯について教えてください。

専門は都市計画とアーバンデザイン、都市デザインです。特に、歴史的な背景を持つ中心市街地でどんどん人口が減っているような地方都市のまちづくりプロジェクトなんかをしながら実践とか研究をやってきたという経緯があります。元々、東京大学の都市工学科の都市デザインの研究施設にずっといたんですけど、そういった歴史的な建物とかまちなみや景観など、市街地だけでなく農山漁村の集落で持続的な地域づくりをしていくためのいろんな調査とか計画策定の仕事をしたりもしました。それで10年ぐらいずっと仕事してんですけど、特に地方にすることが多くて、というのも、地域に入り込んでそこに拠点を構えて研究なりプロジェクトをしていくことをちょうど私の研究室がやってたんです。それで、東京の大学にいなから、しばらくは現地（福井県坂井市三国町）の責任者として大学との連携をとるってのをやってたんですけど、途中、コロナ禍になり移動できなくなったので、1年半ぐらいは三国の現地に住み込んでいました。そんなときに、同じ大学・学科の先輩で神戸大学のSDGsに関わっているかたから、コーディネーターを探してるんだけどって話があって。ちょうどタイミングによかったっていうのもありました。福井の仕事は今も非常勤でもやってるんですけど、次の人にバトンタッチしてもいいかなっていうふうに自分で判断して。それが去年の5月かな。すぐにはやめられなかったんで、しばらくは両方やってたんですけど、さすがにちょっときつくなって、10月からはこっち（神戸）にいなから（福井）に通ってました。なので今ちょうど1年半も経ってないような来たばかりの状況です。私元々関西出身なので戻ってきた感はあるんですけど、でもやっぱり高校からずっと離れてたので、自分がやってきたこととかをまた生かせればいいなっていう気持ちもあります。

Q 神戸大学のなかでのSDGs推進室としての主な取組みについて教えてください。

■産学連携を通じた、大学の知の社会実装

産学連携を通して大学の知を社会実装していくところに力点を置くのが、神戸大学SDGs推進室の一つの特徴です。やっぱり大学の最先端の研究、知を社会に実装していくためには、社会と連携していかないといけない。行政もそうですけど特に民間企業ですね。

主な取り組みとしては、社会連携プロジェクトを立ち上げて、大学の研究者や学生さん、パートナーの企業様や行政の方と組んで、大学の知を実装していったり、発信していったりしています。今回の「持続可能なツーリズム」っていうのも、一年ぐらい前に立ち上げた社会連携プロジェクトの一つです。それ以外にも、関連する活動をやりたいっていう学生さんたちのサポートをしたりとか、イベントをしたりとか、そういったこともしています。あとは特に、カーボンニュートラルの推進と、ウェルビーイングの推進っていう、二つの新しい柱を立てて、両方も去年、全学の本部を立ち上げました。

もう一つ、学生さんのスタートアップ支援というのも、本格的に去年からかなり力を入れてます。特にそのなかでもSDGsとしては、ソーシャルな課題を解決するようなスタートアップを生み出していくことやSDGsを紹介しているような視点で全国の大学と連携をしていきたいと考えています。

Q 社会連携プログラムの中でも、「持続可能なツーリズム」に対する、神戸大学SDGs推進室での具体的な取り組みについて教えてください。

■KOBE SDGs 探究プログラム

はじめは去年のツーリズム EXPO ですね。ただ、ツーリズム EXPO が終わってから、神戸観光局さんが、神戸市として、大阪京都とは違う教育旅行プログラムというのを、SDGsの視点で打ち出していきたいという意向があるというお話を伺って。そこで開発したのが、KOBE SDGs 探究プログラムです。大学でできることをということで、「水」をテーマにしました。工学研究センターと神戸大学SDGs推進室のプロジェクトでもある、マイボトルリサイクルというプロジェクトを活用して、生協にあるウォーターサーバーの紹介をするなど、そういうプログラムを作りました。ただこれだけで終わってしまうのはもったいないということで、このプログラムとは別に、JTBの神戸支店さんと、その後も継続的に神戸大学ならではのプログラムを開発しようとしていて。まさに産学連携ですね。あとは去年、姫路市へ持続可能なツーリズムの提案をしました。姫路観光コンベンションビューローの方がたにもご協力をいただいたのですが、神姫バスのみなさまが連携のコアになっていました。

Q KOBE SDGs 探究プログラムについて、これに協力することの目的やその内容を教えてください。

そうですね、神戸市がなぜこういうことをやりたいかって、大阪ってUSJっていうキラークンテンツがあり、京都もいわずもがなじゃないですか。やっぱり神戸の特性を生かしていくってところで難しさがある。でも、このまちの特性を、SDGsっていう切り口での学修あるいは教育の機会を提供できるんだっていうところを全体として発信していかないと、そう思うんですね。もう一つは、こういうことに学生さんに関わってもらってっていうのも、できればしていきたいと思っているのもあります。ただ、想いがあったりやりたいっていう気持ちがある学生さんもたくさんいるんですけど、授業があつたり集まってもらってそんなに簡単じゃないんですね。そういう難しさもあつても、できたらやっぱりこういうことに学生のみなさんにも関わってもらって、そういう人たちが地域に根ざして活躍してくれる。そういうような人材を輩出していくっていうのもやっぱりある種、大学の役割だと思うし、いわゆる効果として、期待したいなっていうところではあるんですね。

Q SDGs 推進室に関わっている学生さんが、どうやってSDGs 推進室を知ったのか、そこでどのように取り組まれているのか、どういことができるのかを教えてください。

■学生メンバー×SDGs推進室のアクション

最初に声をかけるときは、サークルや学生団体にアプローチしました。まず団体に声をかけて、そこから検討してもらいました。その中で、他のSDGsに関連する団体やサークルに存在を知ってもらうことができ、少しずつ学生メンバーが増えていっています。取り組みについては、たとえば、2023年2月20日に開催した『ゴミ×エネルギー未来妄想ワークショップ』では、学生メンバーが企画から運営までやってくれました。また、2023年2月に開催した『企業SDGs講座・第6弾「ネスレ日本株式会社」』では、司会やディスカッションは全部学生メンバーが行いました。生協学生委員会にも声をかけて、学生メンバーになってもらったりして。こういうことをやっていると、参加した学生で、団体じゃなく個人として学生メンバーになりたいというひとがたまに現れるのですよね。最近では、個人としてSDGs推進室とか、学生委員会があるのを知って、入ってきてくれる子も増えてきています。あとは、ELSレクチャーという、経済学部と法学部の連携講座というのがあります。

この講義は始めて4年目ぐらいですけど、その中で「脱炭素時代の地域づくり」という講義があつて。その講義を受けた履修生の中から、自分たちが学んだことを受けて、大学がこれからすべきことを大学に提言したのです。そのあと、この提言を受けてSDGs推進室副学長が、提言だけじゃなくてアクションをしようとして学生メンバーに伝えました。そして作られたのが、環境会議です。学生メンバーとSDGs推進室が、議論を経て今度はアクションをしていくという。そういうプラットフォームを作りました。

■学生メンバーと創っていくSDGs推進室の今後

SDGs推進室としては、まずは意欲のある学生たちと賛同してくれる企業様と、新しいことを生み出して。そして共感の輪を広げていって、次の展開になっていけばいいかなっていう感じですね。

Q 持続可能なツーリズムの実現に向けた、神戸大学SDGs推進室としての今後の取り組みについて教えてください。

やっぱりできたら、学生さんとの連携。持続可能なツーリズムのプロジェクトとしては、実質的な面でまだそういうところまでいってないかなと思っていて。どういことをしていただくことができるのかっていうのも含めて、大学としてやってるからこそできるプロジェクトにしたいなっていう気持ちはすごくあります。やっぱり他でできることを大学でもしよがないので、アカデミアとして何ができるのか。そこにはもちろん教員もそうですけど、学生さんって重要なファクターなので。まだ学生さんにリーチしてないっていうのもあるので、みなさんみたいな人たちに発信していただいて。それこそ、国際的とかいうか、いろんなバックグラウンドを持つ方たちや専門家たちが集えるように展開したいなと。どうやったら学生さんが参加しやすくなるかなっていうのはもうずっと1年ぐらい考えています。私達なんかやるよりも、やっぱり学生さん自身の言葉で学生さんに発信してもらおうのが一番説得力があるし、キャッチしてもらいやすいと思っています。

土井祥子（どい・さちこ）

和歌山市生まれ、大阪府阪南市出身。2002年東京大学工学部都市工学科卒、2004年同大学院工学系研究科都市工学専攻修了（修士）。専門は都市形成史、都市デザイン、歴史をいかしたまちづくり。日本ナショナルトラスト主任研究員、アーバンデザインセンター坂井（UDCS）チーフディレクターを経て現職。福井工業大学非常勤講師も務める。歴史的市街地や農山村集落の文化的景観の継承に関する計画策定や空き家・空地の再生によるまちづくり、被災文化遺産の復興支援等の実務に従事。

Q. なぜ分散型ホテルで勤務することになったのかの経緯と、現在のお仕事の内容をお聞かせください。

私は国際文化学部（現・国際人間科学部）に入学し、観光というものに着目して勉強するようになりました。そして観光先進国の1つであるイタリアに1年間留学し、休みの長い期間にはアルベルゴ・ディフーズ、日本語で言う分散型ホテル（注1）の調査研究のために、3週間ほど現地の分散型ホテルでインターンをしました。その経験を元にして分散型ホテルについての卒業論文を書き、その後、分散型ホテルをやっているパリューマネジメント社とご縁があり、就職しました。現在愛媛県の大洲市にある分散型ホテルで勤務し、今年3年目を迎えています。業務内容はホテルのサービススタッフとして、フロント、レストランサービス、車での送迎、SNS発信など、オールマイティにやっています。

Q. 大洲町で勤務をしていて楽しかったことや、地域住民、まちの人との連携について難しさを感じたことはありますか？

■お客様の楽しみを通じて地域創生につなげる

楽しさはすごく毎日、色々な意味で感じています。私はもともと地域創生というものに携わりたかったというのもあったので、実際にそれに関わっているところの楽しさもあります。それに、私が働いてきた3年間でお店が10店舗くらい増えているし、空き家がどんどん生まれ変わっていく姿や、まちに活気が出ていく様子を目の当たりにして、自分自身もその中に携わることができているという分でのやりがいを感じたりはすごくあります。本当に第2の故郷ができたような感じで、まちの人とのコミュニケーションというも休みの日は楽しんでいる形です。このホテルに来てくださったお客様にいかにかこのまちの魅力を伝えて、また帰ってきたいと思ってもらえるか、このまちの「ファン」を増やすことによってこのまちを継続的に盛り上げられるかというところが勝負なわけです。その中で、ホテルのスタッフがただサービスを提供するだけでなく、地域とお客様の間に入ることによって、お客様がその場所でいかに楽しめるかということがアレンジ・コーディネートしてあげるのが私たちの仕事になるので、それが実現できたときはお礼の言葉を言って頂けたりとかして、すごくやりがいがある部分だなというふうに思っています。

■重要なポイントは地域住民との対話と合意形成

まちの人との関係性については結構、地域差もあったりすると思いますが、大洲は今一番日本でうまくいっている例と言っても過言ではないくらいのまちの人の協力度合いだと思います。DMOがきちんと機能してちゃんと間に入ってきているのと、パリューマネジメント社からも1人大洲市役所に出向者がいること、また市役所の人たちも観光に力を入れているのもあり、民間企業、DMO、市役所の3つの連携がかなりとれている地域です。また結構面白いのが、この大洲市は去年あたりからDMO主催で「大洲まちづくり大学」を始め、ホテルスタッフ、ホテルの周りの地区の事業者さん、市役所の方が一堂に会して、バスの入込み状況、インバウンドの集客状況、どこからの方が多くですといった情報共有を行っています。また、まちでこのようなキャンペーンが始まります、こういうイベントするのはどうですかといったディスカッションも行って、情報共有とディスカッションの場が今できているのはすごく良い状況だと思っています。私たちは一ホテルのスタッフという民間業者になるので、まちづくりというところはDMOさんにお任せしている部分も結構大いにあるという状況で、私たちは集客装置というような意味合いで動いています。また、ごみが増えたり、渋滞、駐車場問題というのは結構発生していて、ごみを捨てる場所の設置など、その都度トラブルシューティングをしています。何事も、大きいことを何かするとなったときには先に市民の合意をとることはすごく大事で、もしそれがなくなった瞬間に信頼はなくなるので、その点は気をつけてやっていると思います。

Q. 都心部ではなく地域で観光まちづくりをする際のポイントや、地域に企業が入る事で良いなと感じる点についてお聞かせください。

■地域の魅力を活かしたゆったりとした観光

都市の観光はいかに多くの観光地や新しいカルチャーを武器にいかにお金を落としてもらえるかという点が大事になるため、時間はすごく早く流れるし、1か所の場所にずっと何時間もいるようなプランにはならないと思う。地方はそれでは戦えないけれども、地方には素晴らしい建物や文化と歴史が残っていて。例えばすごく素敵なお寺が存在してそこが何も使われてなかったってなるときに、じゃあちょっと座禅の体験をできるように整えてみて、ツアーの中でその座禅体験をして、近くの喫茶店みたいなところでお茶を楽しんでいただいていたみたいな。

あるいはサイクリングで行ってみたいとか。そういうゆったりとしたプランを組んでみようみたいな方向性になると思います。その地域にはどんな魅力があって、その1個の軸をどこに置くかというのが、都市型と地方ではすごく変わってくると思います。

■地方の「たからもの」を魅力化すること

地方にはいっぱい「たからもの」は転がっていると思うんですけど、ただそれをお金の方向に動かすのが簡単ではないという感じです。頭を使わなくちゃいけないし。そして私は、企業が入らないと、やっぱり地域にはなかなかお金が落ちないと思います。お金を落としてもらうための発想を共有できる存在がいなくて。もし企業勤務をした人がターンやリターンしてくれるなら良いんだけど、それでも限界があって。なぜかという、企業は利益を求めて何でもできる団体だけれど、一般社団法人や役所とかになると税金を使う団体になって、そうなる公平性や平等性というものにすごく気を使わないといけなくなってしまうので・・・。利益を求めるというノウハウを持っている団体がそこにいるということは、その地域がちゃんと経済的に潤う、将来に持続していくまちになるというところでは、やっぱり必要な要素としてあるのではないかと、私は民間の立場で入って思います。想いがちゃんと一緒であれば、そのやり方が色々たくさんあるに越したことはなくて。私たち（パリューマネジメント社）は、日本の文化をつなぐということでも大きなゴールの手前に古民家の利活用というところがあり、そして集客装置としてのホテルとして活用しているんだけれども、観光まちづくりの先進事例となってまちを存続させるといところがぶれてなければ、ちゃんと歩み寄ればすり合ってくるだろうし。だからお互い寄り添うことが必要だし、企業はやっぱり、さらに地域の目線に立つことが大事だなというふうに思います。

Q. 最後に、今後の展望について教えてください。

■分散型ホテルの可能性を追究したい

イタリア留学で分散型ホテルに出会ったことは本当に私の人生において大きく、今後の可能性をすごく感じたので、何かしらの形で分散型ホテルに関することに携わりたいと考えています。大洲の分散型ホテルで働いている中で何が1番幸せな瞬間だったかという、やっぱりお客様と地域を繋げたときだったりとか、地域の人びとが喜んでときとか、まちが少しでも活気づいたとき、自分たちがいることによって出会ったりとか。

まちの魅力というものを自分が介在してちゃんと相手に伝えていくというところにすごく魅力を感じるし、分散型ホテルというのはそれをホテルの形をもってしてうまく伝えられる手段としてやっぱり有効だなと。まちの歴史や文化と一緒に滞在の中で伝えることができるし、魅力もより伝わる形だなという風に思っています。こうした分散型ホテルをもっともっと日本の様々な地域に広めていきたいし、分散型ホテルによって地域が潤うような形を大洲で作っていきなと思っています。

■大洲市のファンを増やしたい!!

今働いている大洲市という観点でいくと、私はとにかく大洲市のファンを増やしたいと思っています。自分自身がファンだからこそ。お客様にとって、この大洲というまちがただ1個の観光地とか、ただ旅行行った1か所くらいで終わるんじゃなくて、絶対「また来たい」に繋がりたいと思っています。そういう地域が増えれば増えるほど、多分心豊かになるって思っています。私自身が今まだ覚えている地域って、どここの景色が良かったからとかじゃなくて、やっぱりそこで出会った人の記憶が鮮明にあると、もうその地域って忘れられないよね。なんか、そういう経験が現体験としてあるからこそ、分散型ホテルを通じてまち全体を楽しんでもらうことによって、お客様の中でまた来たいな、今度は紅葉のシーズンに来てみようかなって感じてもらえるんじゃないかなと思うし、そういう人たちをたくさん生み出せるチームにしたいと思っています。

●(注1) 分散型ホテル・・・まちに点在する地域の歴史的建造物や空き家をそのまま活用し、顧客が滞在できる宿泊施設としてリノベーションしたもの。まち全体を一つのホテルと見立てるようなイメージで、イタリアで生まれた「アルベルゴ・ディフーズ」が発祥とされている。フロントやそれぞれの客室、食堂が分散・独立しているため、宿泊した人たちが滞在中に自然とまちを回遊し、地域の人の交流が生まれやすいことが特徴といえる。

石川穂乃香（いしかわ・ほのか）

2016年神戸大学国際文化学部入学、イタリアのヴェネツィア大学へ1年間留学し、2021年卒業。大学のゼミでは観光について学び、留学中イタリアの「アルベルゴ・ディフーズ」で3週間のインターンを行った経験から、地域活性化の手段としての分散型ホテルの可能性に着目する。卒業後、日本で分散型ホテルを運営するパリューマネジメント株式会社就職。現在、愛媛県大洲市にある分散型ホテル「NIPPONIA HOTEL 大洲 城下町」で勤務している。

活動報告 2

神戸ユニオン教会での史料整理・調査  
神戸の欧米系コミュニティの史的解明に向けて

京阪神の研究者有志からなる「神戸市域における欧米系コミュニティ研究会」では、2022年度より神戸市灘区の神戸ユニオン教会にて史料の整理と調査を実施しています。この教会は1870年代初頭の創建であり、神戸で最も古いプロテスタント教会です。ここには最近100年間の歴史資料（史料）が所蔵されており、その数は英語史料だけで4万～5万点に上るとされています。他方でドイツ系コミュニティの中心的教会でもあったためドイツ語史料も所蔵されているが、概数は不明なものこちら膨大な量が保管されています。こうした史料を利用可能なものにするためにも、まずはそれらを整理し、また目録化することが求められており、同教会の支援を受けながら、研究代表者である衣笠太朗講師のほか、神戸大学・大阪大学・京都大学などの教員と院生に協力を仰ぎながら整理・調査活動を遂行しています。

これまでの事業内容は大きく分けて4つあります。第一に、ドイツ語史料の整理を実施してきました。教会でミサが実施される第二日曜日を利用して、ミサ後の時間帯に4時間程度の作業を行いました。基本的な作業としては、①個々の史料の概要を確認したうえで目録作成、②史料のカメラによる表紙撮影、③カメラとスキャナーを用いた重要史料の内容撮影が挙げられます。現状では、ドイツ語に関しては①と②がほぼ完了し、③を継続的に実施している段階です。今後は英語の史料についても同様の作業を行っていく予定です。

第二に学術的成果として、2023年1月21日にドイツ現代史研究会において神戸ユニオン教会での史料整理・調査をテーマとした研究報告会が実施されました。そこにおいては、林祐一郎による「ドイツ系プロテスタント教会による日本伝道と関西一普及福音新教伝道会の宣教師エミール・シラー（1865-1945）を中心に」および中村綾乃による「神戸のドイツ人コミュニティと第二次世界大戦」という2本の報告がなされ、その後の質疑応答も併せて活発な議論が展開されました。

第三に広く市民を対象とした成果発表として、同年6月27日から9月27日まで、神戸大学社会科学系図書館2階展示ホールにて企画展「港の見える教会から—多文化都市神戸とユニオン教会—」が開催されました。これに関しては、神戸新聞や朝日新聞による取材と記事化もあり、多くの来場者に恵まれました。

第四に同年9月後半にオーストラリア・キャンベラのオーストラリア国立図書館での史料調査を実施しました。同図書館には19世紀後半から20世紀末までの日本の欧米系コミュニティに関する史料コレクション（ハラルド・S・ウィリアムズ・コレクション）が所蔵されており、そこには神戸やキリスト教宣教に関する史資料も多数含まれています。そうした史料を収集・分析するために調査滞在を行いました。



写真1



写真2



写真3

（写真1枚目）神戸ユニオン教会での史料整理後に撮影した、教会の方々との集合写真

（写真2枚目）神戸ユニオン教会での史料整理・調査の様子

（写真3枚目）企画展「港の見える教会から—多文化都市神戸とユニオン教会—」の様子

活動報告 3

姫路市と地域連携協定を締結  
産学共創の試行錯誤を広げていく



Promis 地域連携センターは2022年度、姫路市役所と地域連携協定（部局協定）締結にむけた検討を開始。大学院と学部の教育活動と連動した企画も実施しました。

2023年1月28日（土）、Promis 地域連携センターは、国際文化学研究所ならびに国際人間科学部グローバル文化学科とともに、姫路市で産学共創フィールドスタディを実施しました。このフィールドスタディには、院生と学部生の約30名にわけて、神戸大学地域連携推進本部、SDGs推進本部の教職員が参加するとともに、姫路観光コンベンションビューローならびに神姫バス株式会社からも関係者の参加を得ました。当日は午前にはビューローの職員のかたの先導のもと、ピオレ姫路おみやげ館やホテルモンテ姫路などの姫路駅前施設や商店街のまち歩きをつうじて、姫路市の観光をめぐる基本前提を参加者一同で学びました。

午後からは姫路市市民会館にて、学生たちが姫路の観光振興をめぐるプレゼンテーションを行ないました。参加学生のプレゼンテーションは、国内外の若者に姫路の魅力をアピールするための情報発信についての提案、とくにInstagramでのショート



動画を活用するアイデアを中心としたもので、このプレゼンテーションを受けて、姫路観光コンベンションビューローならびに神姫バス株式会社の職員社員のかたがたと活発な質疑や意見交換を行ないました。

こうした取り組みを踏まえ、姫路市との協議を重ね、2023年3月22日（水）、姫路市の清元秀泰市長、国際文化学研究所の藤濤文子研究科長が出席し、地域連携協定の締結式が執り行われました。協定文のとりかわしを終えた清元市長は、旧制姫路高等学校をルーツにもつ神戸大学の部局が、ひさかたぶりに姫路市との関係を復活させることを祝福するとともに、リベラルアーツ教育が今こそ重要であること、その知見を活かして姫路市とのかかわりを大切にしてほしいと挨拶をされました。

2022年度の基礎的な取り組みや地域連携協定締結を踏まえ、Promis 地域連携センターは今後も、国際交流、産業振興、観光の3つの観点から姫路をフィールドとした研究調査を推進していく予定です。

活動報告 2

神戸ユニオン教会での史料整理・調査  
神戸の欧米系コミュニティの史的解明に向けて

京阪神の研究者有志からなる「神戸市域における欧米系コミュニティ研究会」では、2022年度より神戸市灘区の神戸ユニオン教会にて史料の整理と調査を実施しています。この教会は1870年代初頭の創建であり、神戸で最も古いプロテスタント教会です。ここには最近100年間の歴史資料（史料）が所蔵されており、その数は英語史料だけで4万～5万点に上るとされています。他方でドイツ系コミュニティの中心的教会でもあったためドイツ語史料も所蔵されているが、概数は不明なものこちら膨大な量が保管されています。こうした史料を利用可能なものにするためにも、まずはそれらを整理し、また目録化することが求められており、同教会の支援を受けながら、研究代表者である衣笠太郎講師のほか、神戸大学・大阪大学・京都大学などの教員と院生に協力を仰ぎながら整理・調査活動を遂行しています。

これまでの事業内容は大きく分けて4つあります。第一に、ドイツ語史料の整理を実施してきました。教会でミサが実施される第二日曜日を利用して、ミサ後の時間帯に4時間程度の作業を行いました。基本的な作業としては、①個々の史料の概要を確認したうえで目録作成、②史料のカメラによる表紙撮影、③カメラとスキャナーを用いた重要史料の内容撮影が挙げられます。現状では、ドイツ語に関しては①と②がほぼ完了し、③を継続的に実施している段階です。今後は英語の史料についても同様の作業を行っていく予定です。

第二に学術的成果として、2023年1月21日にドイツ現代史研究会において神戸ユニオン教会での史料整理・調査をテーマとした研究報告会が実施されました。そこにおいては、林祐一郎による「ドイツ系プロテスタント教会による日本伝道と関西一普及福音新教伝道会の宣教師エミール・シラー（1865-1945）を中心に」および中村綾乃による「神戸のドイツ人コミュニティと第二次世界大戦」という2本の報告がなされ、その後の質疑応答も併せて活発な議論が展開されました。

第三に広く市民を対象とした成果発表として、同年6月27日から9月27日まで、神戸大学社会科学系図書館2階展示ホールにて企画展「港の見える教会から—多文化都市神戸とユニオン教会—」が開催されました。これに関しては、神戸新聞や朝日新聞による取材と記事化もあり、多くの来場者に恵まれました。

第四に同年9月後半にオーストラリア・キャンベラのオーストラリア国立図書館での史料調査を実施しました。同図書館には19世紀後半から20世紀末までの日本の欧米系コミュニティに関する史料コレクション（ハラルド・S・ウィリアムズ・コレクション）が所蔵されており、そこには神戸やキリスト教宣教に関する史資料も多数含まれています。そうした史料を収集・分析するために調査滞在を行いました。



写真1

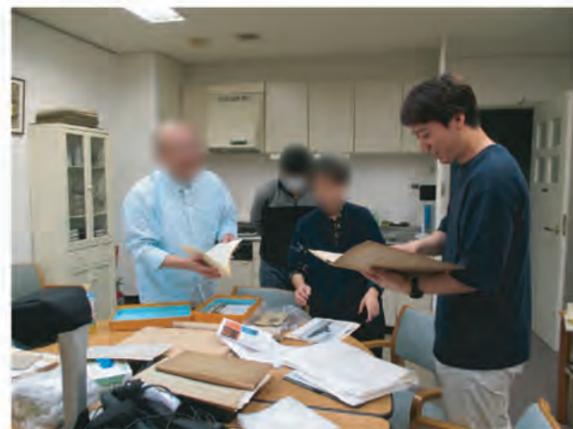


写真2



写真3

(写真1枚目) 神戸ユニオン教会での史料整理後に撮影した、教会の方々との集合写真

(写真2枚目) 神戸ユニオン教会での史料整理・調査の様子

(写真3枚目) 企画展「港の見える教会から—多文化都市神戸とユニオン教会—」の様子

活動報告 3

姫路市と地域連携協定を締結  
産学共創の試行錯誤を広げていく



Promis 地域連携センターは2022年度、姫路市役所と地域連携協定（部局協定）締結にむけた検討を開始。大学院と学部の教育活動と連動した企画も実施しました。

2023年1月28日（土）、Promis 地域連携センターは、国際文化学研究所ならびに国際人間科学部グローバル文化学科とともに、姫路市で産学共創フィールドスタディを実施しました。このフィールドスタディには、院生と学部生の約30名に代わって、神戸大学地域連携推進本部、SDGs推進本部の教職員が参加するとともに、姫路観光コンベンションビューローならびに神姫バス株式会社からも関係者の参加を得ました。当日は午前にはビューローの職員のかたの先導のもと、ピオレ姫路おみやげ館やホテルモンテ姫路などの姫路駅前施設や商店街のまち歩きをつうじて、姫路市の観光をめぐる基本前提を参加者一同で学びました。

午後からは姫路市市民会館にて、学生たちが姫路の観光振興をめぐるプレゼンテーションを行ないました。参加学生のプレゼンテーションは、国内外の若者に姫路の魅力をアピールするための情報発信についての提案、とくにInstagramでのショート

動画を活用するアイデアを中心としたもので、このプレゼンテーションを受けて、姫路観光コンベンションビューローならびに神姫バス株式会社の職員社員のかたがたと活発な質疑や意見交換を行ないました。

こうした取り組みを踏まえ、姫路市との協議を重ね、2023年3月22日（水）、姫路市の清元秀泰市長、国際文化学研究所の藤濤文子研究科長が出席し、地域連携協定の締結式が執り行われました。協定文のとりかわしを終えた清元市長は、旧制姫路高等学校をルーツにもつ神戸大学の部局が、ひさかたぶりに姫路市との関係を復活させることを祝福するとともに、リベラルアーツ教育が今こそ重要であること、その知見を活かして姫路市とのかかわりを大切にしてほしいと挨拶をされました。

2022年度の基礎的な取り組みや地域連携協定締結を踏まえ、Promis 地域連携センターは今後も、国際交流、産業振興、観光の3つの観点から姫路をフィールドとした研究調査を推進していく予定です。

## 朝来市生野の観光 PR 動画作成に協力しました

現代のネット社会において、観光 PR をネット上の動画として配信することは極めて重要で、日本国内だけでなく世界からの自由なアクセスによってあらたな観光客を生み出す起爆剤となっています。兵庫県・朝来市と神戸大学は2004年に大学協定を結び、それ以来さまざまな連携活動を実施してきましたが、昨年度は、生野銀山や2017年に日本遺産に認定された「銀の馬車道」などで知られる朝来市生野の歴史と魅力を伝える短編 PR 動画を共同で制作しました。国際文化科学研究科で映画学を専門にしている教員と、人文学研究科の歴史学を専門にしている教員が企画から演出まで協力しました。

本動画では特に若年層にアピールするために、兵庫県立生野高等学校のマスコットキャラクター「いくのん」と、生野銀山の“地下アイドル”として近年人気を誇る GINZAN BOYZ の「よさぶろう」に出演してもらいました。完成した動画は近日中に YouTube で公開されるほか、県内各地のイベントでも上映を計画しています。国際



写真提供：朝来市

文化学の利点を生かし、英語、ドイツ語、フランス語の字幕も作成中です。生野は、黒澤明監督の映画『生きる』（1952年）に主演した俳優の志村喬（1905-1982）のふるさとでもあり、志村喬記念館には彼の活躍をしのぶ写真や映画ポスターが展示されているほか、生野銀山の福利施設「協和会館」で実際に使用されていた35ミリ映写機なども展示されています。

## 地域と課題を共有する

## 南丹市美山観光まちづくり協会との観光まちづくりをめぐる連携活動

連携団体である一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会（以下、美山 DMO）は、2022年度と2023年度、観光庁の第2のふるさとづくりプロジェクトのモデル実証事業に採択され、Promis 地域連携センターは、神戸大学国際人間科学部と連携しながら、課題解決型研修プログラムの造成に取り組んでいます。課題解決に先立つ課題の共有を重視し、美山が抱える問題は、都市が抱える問題と実際にはつながっていることを学生たちに気づかせるラーニングツーリズム

のプログラムづくりを、美山 DMO とともに行っています。国際人間科学部では、2017年の発足以来、グローバル・スタディーズ・プログラム、通称 GSP と呼ばれる海外研修および国内フィールド研修を企画開催してきました。コロナ禍のなか、2020年度の冬からは観光まちづくりをテーマとして美山での国内研修を開始。これまでにのべ90名の学生たちが美山で学び、なかには研修の終了後も継続的に美山を再訪している者もいます。Promis 地域連携センターは2022年度



からラーニングツーリズムの企画に協力し、学部による催行を支援してきました。

たとえば GSP 京都美山 2022 夏のプログラムは、4 学科から 16 名の学生が参加。事前学修を経たあと、2022 年 9 月 12 日（月）～14 日（水）、現地学修を行ないました。美山で宿泊業等に従事する 5 名のかたがたにインタビューを行ない、今日の日本の中山間地域が抱えている現状と課題について学ぶとともに、美山を効果的にプロモーションする方法について考えました。インタビューの内容を、ウェブ上に掲載できる記事にまとめ、その記事のいくつかは、実際に美山 DMO のサイトに掲載されました。参加学生たちは、美山の現地でかやぶき体験にも参加。かやぶき職人のかたと交流しました。

2022 冬のプログラムは、4 学科 11 名の学生が参加。夏と同様に事前学修を経て、2023 年 2 月 15 日（水）～17 日（金）に現地学修を行ないました。美山 DMO が毎年実施している第 7 回美山エコツーリズム大会（町内外の事業者の商談会）の会場設営と運営補助にかかわることで、参加学生たちは実際の旅行商品造成の現場に触れました。

この冬のプログラムに先立ち、美山では美山かやぶきの里雪灯廊が 1 月末から 2 月初旬の週末におこなわれ、過去に GSP 京都美山に参加した学生 5 名がボランティアとして参加しました。Promis 地域連携センターは、こうしたプログラムの企画をつうじて、若者の再訪を促す地域の仕組みづくりに取り組んでいます。

## 学内外での連携と今後の展開

### ●持続可能なツーリズムのためのネットワーク

SDGsをはじめ、グローバルな課題に取り組むには、世界経済の10%を占めるといわれている観光は無視できない領域です。国際文化学研究科（国際人間科学部グローバル文化学科）は、観光分野においてSDGsを推進している国連世界観光機関（UNWTO）に、神戸大学が賛助加盟することを主導するだけでなく、観光を結節点として、学内外のさまざまな部局・組織と連携してきました。例えば、神戸大学のSDGs推進室（学術研究推進機構）の社会連携プロジェクトの一つとして、「持続可能なツーリズム」プロジェクトを立ち上げ、自治体やDMO（観光地域づくり法人）、企業やNGOと連携し、観光分野での異分野共創研究教育と産学連携を進めています。具体的には、本学の地域連携本部や産官学連携本部の協力を得ながら、神戸観光局やJTBと連携しています。神戸における教育旅行の魅力を向上させるべく、「KOBE SDGs探究プログラム」や「ひょうご神戸B&Sプログラム」の開発・運営に参画し、修学旅行生にキャンパスでの学修や神戸大学生とのまち歩きを体験する機会を提供してきました。また、南丹市美山町や姫路市などでのセミナーやフィールドスタディにご協力いただいている神姫バス（株）とは、姫路駅前の活性化や神戸市中心部での周遊経路の発掘などのプロジェクトを準備しています。

### ●人と知の循環による地域活性化にむけて

神戸・兵庫は大学と大学生が多いにもかかわらず、卒業後に地元で残って就職する割合が低く、人口減少（流出）の一因となっています。重工業や流通・ファッションといった戦後の神戸経済を特徴づけた基幹産業が縮小するなか、医療・バイオ部門に期待が集まるものの、それら資本集約型産業に雇用の大きな増加を期待することは難しいのが現実です。一方、観光経済は、インバウンドの取り込みなどの課題はあるものの、関西圏という立地や陸海空の交通網を活かして発展する可能性は小さくありません。しかし、観光関連産業は、季節や曜日による人流の変動が大きいため、非正規雇用が多く、それを克服するためには、通年での安定した集客が必要となってきます。また、2030年頃とされる神戸空港国際化を見通すと、インバウンドだけでなく、空港利用を下支えする関西からのアウトバウンド（特に若者の海外旅行）の増加も課題です。来神者数の安定化には、国内観光（特に教育旅行）とインバウンド（特にMICE）がカギになります。それらを増やすような魅力ある観光資源を、歴史文化およびSDGsを軸として発掘し、提示することが大学に期待されています。また、神戸や関西の大学生がアウトバウンドとして海外で探求を深め、その体験をもとに地元で働くことができるような仕掛けづくりも重要です。そのために、自治体・企業などさまざまなステークホルダーと連携し、観光まちづくりを主題とした異分野共創の研究教育や社会実装を今後も進めていきます。

地域連携センター Activity Report 2022-2023

●発行日：2023年10月3日

●発行：神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）地域連携センター  
兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1 鶴甲キャンパスB棟420

<http://promis.cla.kobe-u.ac.jp/>

●2022年度GSPツーリズムEXPO参加者：上田秀賢、岡本なつみ、Thaw Tar Htin Aung、中北将吾、長谷川舞香、古川慎一郎

●2023年度京都美山・GSPツーリズムEXPO参加者：大岡瑞季、上田耀大、栗山美綾、田中昂、向山達稀

●デザイン：中北将吾